

対話イン京都女子大 2015 詳細報告書

報告者：針山日出夫

【概要】

今年で3回目となる京都女子大での対話会が8月3日、同学現代社会学部の207教室で開催された。参加者は、学生7人（全員現代社会学部）、水野教授、シニア6名の合計14名。参加者が少なかったことで、基調講演から自由討論終了迄全員が一堂に会しての密着型の対話会となった。

講師・若杉氏の説明に対する真摯な姿勢や人柄が会場に染み渡り質問や意見を聞きながらの対話型講演のアイデアは学生達にとっても緊張から解放され平常心で講演に集中できた様子であった。

講演後の自由討論では、約2時間弱の間、学生達-水野先生-シニアのトライアングルが相互に絶妙な意思疎通とバランスが取れて、建設的で宥和的な対話が成立した。

今回の如く全員密着型の対話では、全ての人の発言・意見を共有できたことで今までの対話会では味わえなかった充実感があった。

学生達の発言は率直で、原子力問題に対する自分の考え方が肯定的に変化したと述懐した学生もいた。全ての学生が「メディア情報や空気に流されず自分の意見を持つ事の重要性を認識した」との感想を述べた。シニア全員は世代を超えた対話の可能性と達成感を実感した。

1. 対話会議事次第

日時：平成27年8月4日 13時～16時半

場所：京都女子大・現代社会学部 207教室

参加：(学生)7名、(教官)現代社会学部・水野教授、

(シニア)若杉和彦、三谷信次、中村威、松永健一、碓本岩男、針山日出夫)

<進行スケジュール>

13:00～ 開会、自己紹介

13:10～14:20 基調講演「生活を支えるエネルギーを考えよう」(講師：若杉和彦)

14:30～16:30 自由討論、感想、意見、質問回答

16:35 閉会リマーク、閉会

2. 基調講演

講演演題：「生活を支えるエネルギーを考えよう」

講師 : SNW 若杉和彦氏

講演の要約: エネルギー問題や環境問題全般について概説しつつ、節目毎に学生達の感想や疑問点を聞きながらの対話型講演を実施。

- ー 生活をエネルギーと放置できない人口問題、環境問題について
- ー エネルギーの種類と特質、各エネルギーの問題点についての概説
- ー 東電福島原発事故の原因、反省と新安全基準
(原子力発電の仕組み、原爆との根本的違い、放射線のリスク、食品安全について、東電福島事故の事象進展と安全対策の在り方)
- ー リスクについて考える
(リスクの一般概念とは、リスク評価と安全目標、確率的安全評価手法とはどういうものか、近代科学技術の恩恵とリスクとの共存について)
- ー 主要国の原発動向とエネルギー政策の検討

3. 自由討論

通常の対話会では参加者全員がいくつかのグループに分かれグループ毎に設定された対話テーマに沿って対話を実施しているが、今回は参加者が予定より少ない14名であったので全員が一堂に会しての自由討論を行った。以下に自由討論での話題を列記する。具体的な対話の中身は以降に掲載する各参加者の感想や事後アンケートと重なる点が多々あるのでここでは省略する。

＜自由討論での話題：順不同＞

- ① エネルギー問題、環境問題全体の論点整理
- ② 原子力を受け入れたくない人と接する際の留意点、配慮事項は何か？
- ③ 低頻度でしか発生しない事故でも一度起こると甚大な影響を齎す特性のある原子力発電のリスクをどのように受け止めるか？
- ④ エネルギー問題と正確な知識に基づく自分自身の考え方の整理の在り方
- ⑤ 原子力のリスクと便益について市民の理解を得る為に何が必要か？
- ⑥ 多くの市民に環境問題に関心を持ってもらうために何が必要か？
- ⑦ 超長期的に考えると原子力は繋ぎの技術か？
- ⑧ 食品安全と風評被害について

4. 参加シニアの感想（順不同）

＜三谷信次＞

これまでと少し勝手の違う対話会であった。対話当日蓋を開けるまで、どの

ような形で学生と対話するのか最初はよく見えなかったが、夏休みに入る最終日の午後に、熱心に参加してくれた7人の学生達に厚く感謝致します。人数が少なかったので一人ひとりすべての学生の率直な考えを聞くことが出来てとても有意義でありました。

対話前には原子力エネルギーの利用や放射線の性質などに分からない部分が多かった学生達も、シニア達と対話を進めるにつれて、最初の思い込みなどが払拭されていったようで、対話終了直後には晴れやかな表情を浮かべて、これまでの認識が変わったという学生も何人かいました。夏休み突入直前の最終授業終了直後にこのようなスケジュールを組んで学生達を集めて下さった水野先生に厚く感謝致します。

また、関西地区の参加シニアの方々の対話ポテンシャルの高さに、日頃の精進の程が窺い知れて感服いたしました次第です。

<若杉和彦>

京都女子大での対話会参加は、今回が昨年に引き続き2度目となった。女学生を対象とした対話会は今まであまり機会がなかったが、女性は次世代を直接養育する役割を担う意味から重要な機会と捉えており、それなりに準備を進めた。基調講演を指名されたため、女性が興味を持ってくれそうな「生活を支える」の言葉を演題にすえるとともに、可能な限り平易な文言で説明資料をまとめた。また、一般に女性は発言が少ないので、講演中出来るだけ対話の出来る話し方に努めた。当日は予想外に参加学生の数が少なかったが、全員真剣に聴講し、各自自分の感想や質問を発言し、それらに参加シニアがそれぞれ協力して回答する等双方向に交流し、実質的に内容の濃い対話会になったと考えている。日本のエネルギーの実情、原子力問題や事故影響の実際の姿等、学生が正確に理解し、回りに伝えてくれることを願う。水野先生のご努力には感謝しなければならないが、何分例年のない猛暑の京都で、しかも夏休み直前に開催されたことが学生の出席率低下につながったのではないかと思われる。次回の企画には、開催時期や対話内容について事前に学校側と検討することを可能な限り含める方がいいと思う。

<中村威>

猛暑の中、また大学における前期試験の最終日、明日からは夏休みという中で、水野教授のご配慮で行われた対話会、午前の試験を終え、帰省された方も多く13時からの対話会には参加学生も7名（途中退席者3名）とまさにマンツーマンという感じで行われた。

まず、若杉講師による講演では、エネルギーと人類とのかかわり、福島事故

後の対応などについて説明がなされ、テーマごとに学生の感想、疑問、意見などを聞くというかたちをとり、それらに都度回答し、疑問の解消に努めていく形で進められた。

全体の講演が終了したころは、途中帰省のためか退席した学生もおり、最終的には学生側が4人、SNW側が6人という少々いびつな対話会となったが、学生たちの質問に対して、いろいろな立場からの説明、回答がなされ、聞く側にとっては案外面白かったのではないかと思うが逆に混乱してもう一つであったのかもしれない。しかし、小生としては、平生の対話会で聞けないSNW各位のいろいろな意見、考え方を聞くことが出来たのはそれなりに収穫であった。

少人数での対話は、全員の発言が得られることがメリットとして挙げられるが、彼らの関心事、興味のポイントが一致している場合には、問題がないがそうでない場合にはどうなのだろうかかと少々気になることであった。いずれにせよ、今回の対話会は、少人数ということになってしまい、もう少しの参加が欲しかったという気がするが、事故から3年以上がたち、原子力事故にたいする関心が無くなって来つつあるのかなということも感じさせられるものであった。

<碓本岩男>

原子力討論会の参加は今年の広島以来2度目であり、今回は文科系の女子大生との討論ということで、どのような討論になるのか、まったく予想もつきませんでした。

京都女子大はこの討論会の午前中まで試験があり、試験後から夏休みが始まるという日でしたが、7名の学生が参加してくれました。参加者が少なかったこともあり、グループ分けはせず、皆で討論しました。

京都女子大での討論会は今回で3度目ということでしたが、7名の学生は皆、初参加のようでした。それにも係らず、聞き上手、質問上手であり、シニアが喋り過ぎたと感じるほどでした。

先生が積極的に学生の意見を引き出してくれたこともあり、学生全ての意見を聞くことができました。多くの学生が今回の講演、討論で原子力への理解が深まったこと、原子力には漠然と反対の気持ちを持っていたが変わったこと、家族、友人などに本日の講演内容を話したいと思ったこと、などシニアにとっては嬉しい意見がありました。世代を超えて、シニアの思いも伝えることができたのではないかと感じることができ、非常に有意義かつ楽しい時間を過ごさせて頂きました。

エネルギー問題、原子力問題を正しく理解してもらうためには、日本という国の資源、人口、エネルギー、食料、経済状況、生業、更に地球全体について

の環境、気象、エネルギー、食料、人口、国際状況、この他にも科学、技術、工学、工業製品、安全、危険、リスク、規制（法律）・基準など、多くの情報を提供し、説明する必要がありますが、限りある時間での講演、討論だけで理解してもらうことは現実的には困難だと思います。それでも、今回、学生さんが真摯かつ熱心に討論会に参加してくれたことにより、シニアがこのような活動が続けることで、若者にエネルギー問題、原子力問題に興味を持ってもらい、正しい情報を少しであっても理解してもらうことは、意義あることだと改めて感じることができました。

<松永健一>

私にとっては、「女性群」との初めての対話であった。貴重な機会なので、事前にどんな話をどんな風に述べるべきかを考えてみた。女性の立場から具体的、現実的に話さないと受け入れられないだろう、また、真剣な態度でないと共感されないだろうと考えた。最初は、原子力発電所の事故時にどう対処するか、どう逃げるかというような現実的な話題も考えたが、結局、母となる「女性」を念頭に、①「人間の幸せとはなにか」と、②「母として子供に接する場合の放射線問題」をテーマにすることにした。①では、幸せとは何かは分からないが、仮に「国民一人当たりのGDP」とすれば、それは「国民一人当たりのエネルギー消費量」と比例の関係にあり、人間の幸せにとってエネルギー問題は極めて重要だと述べた。この点は基調講演で説明があったが、その「意味」を強調したつもりである。②では、測定限界以下の放射エネルギーと確認されても、福島県産の米は食べない地元女性の例を出して、この考えに立てば、自らが放射性物質（約7,000ベクレル）であることを知ったら、母親は子供を抱かないのか。抱かない場合の子供の成長への計り知れない悪影響と両立しない関係（相反関係）になるという話をした。

結局、リテラシーを養成しないと、賛成論や反対論だけを述べても、福島米の例のように、理解が浸透しないのではと言いたかったのであるが、アンケート調査に「リテラシーの大切さがよく分かりました」と答えた参加者がいたことは、嬉しい限りである。女性の理解を得ることは、世論形成の上では大変重要であり、女性向けの対話能力を身に着けたいと痛感した次第。

<針山日出夫>

今回は、8月3日という前期最後の日の試験終了後の午後に明日から夏季休暇というタイミングにもかかわらず熱心に集まってくださった7人の学生さんに感謝したい。

基調講演講師・若杉氏の説明に対する真摯な姿勢や穏やかな人柄が会場の隅々に染渡り、プレゼンの区切りで感想や意見を聞きながらの対話型講演のアイデアは学生達にとっても緊張から解放され平常心で講演に集中できたのではないかと思う。

講演を踏まえての自由討論では、約2時間弱の間、学生達—水野先生—シニアグループのトライアングルが発言内容などで絶妙にバランスが取れ、暗黙の信頼関係の下での建設的で宥和的な対話が成立した。これも水野先生の普段からのご指導の賜物と感謝申し上げます。

小生が今回の対話会で一番強調したのは、日本ではなぜ感覚的な議論しかできないのか？その病理の根源はどこから来るのかを女学生に分かり易く説明を試みることでした。この「母性原理が支配する日本の病理」について機会があればじっくり意見交換してみたいものです。

学生達の発言はどれも率直で本音の意見だったと思います。原子力問題に対する自分の考え方が肯定的に変わったと述懐した学生もいましたが(7人中3人)、全ての学生が「メディア情報や空気に流されず自分の意見を持つ事の重要性を認識した」との感想を述べたことに強い印象を持ちました。

以上